第103回東京大学公開講座

「楽」

主催　東京大学
（財）東京大学綜合研究会

開講にあたって

東京大学の公開講座に、ようこそおいでくださいました。今回のテーマは、「楽（らく）」です。

今まで、学問や研究には、厳しく苦しいイメージがつきまとってきたように思います。当然、その中心である大学も同じです。「勉強」というのは、「勉めて強いる」わけです。けれども、もともと学問とは楽しいもののはずです。今まで知らなかったことが分かるようになるのですから、目の前がパッと開けて、幸せになるはずではありませんか？なぜ、いつから、学問は「楽」から遠いものになってしまったのでしょうか？

もちろん、ふざけたり、いい加減であったりして良いはずはありません。真面目に、とことんひとつのことを掘り下げる。あるいはそれは、辛く厳しい作業かもしれません。でも、同時に、フットワーク軽くしなやかに越境していくこともできるはず。

もし、今の日本の社会の中に、勉強なんかつまらない、学問なんかくだらない、といった風潮があるとしたら、その責任の一端は、学問から「楽」を奪ってしまった大学にもあるのかもしれません。

そんな若干の反省と、一方で、おちゃらけを「楽」と勘違いしている世の軽率さへのいささかの怒りも込めながら、今回の公開講座を企画しました。企画運営委員会は、毎回、和やかに笑い声に満ちた雰囲気の中でおこなわれました。こういった「楽」の精神を発揮することで、社会も個人の人生も、政治も経済も学問も、もう少し風通しがよくなるはずだと信じています。

東京大学が、総力を結集して、「楽」の学問に挑戦いたします。その成果を、どうぞごゆっくりとお楽しみください。

平成17年4月
第103回東京大学公開講座企画委員会
委員長 **花田 達朗**
（東京大学大学院情報学環長）

講義日程

※初日は、二人の先生が小テーマごとに交代で講義を行います（途中休憩あり）。
※やむを得ない事情によりプログラムを変更する場合があります。

【1日目】4月2日（土）

13:30〜13:40	開講の挨拶	小宮山宏（東京大学総長）
13:40〜16:40	音楽の「楽」：西洋と日本、そして日本の内なる西洋	ヘルマン・ゴチェフスキ（総合文化研究科助教授） 渡辺　裕（人文社会系研究科教授）

【2日目】4月9日（土）

13:30〜14:50	日本型年功制は楽だったのか	高橋伸夫（経済学研究科教授）
15:10〜16:30	サルの社会、ヒトの組織 ―人間やっぱりサルだった―	佐倉　統（情報学環助教授）

【3日目】4月16日（土）

13:30〜14:50	がんと「楽」	中川恵一（医学系研究科助教授）
15:10〜16:30	リラックスと自然体 ―その矛盾と逆説―	西平　直（教育学研究科助教授）

【4日目】4月23日（土）

13:30〜14:50	それでもテレビゲームはオモシロい	馬場　章（情報学環助教授）
15:10〜16:30	楽々３次元コンピュータグラフィクス	五十嵐健夫（情報理工学系研究科講師）

【5日目】5月14日（土）

13:30〜14:50	そこそこ都市のすこゆる生活	村松　伸（生産技術研究所助教授）
15:10〜16:30	都市の眼の楽しみ ―ミステリー・考現学・タウン誌―	佐藤健二（人文社会系研究科助教授）
16:30〜16:40	閉講の挨拶	花田達朗（企画委員長・情報学環長）

各講師講義内容の概要

4月2日(土)

講義題目

音楽の「楽」：西洋と日本、そして日本の内なる西洋

総合文化研究科助教授 ヘルマン・ゴチェフスキ　人文社会系研究科教授 渡辺　裕

「音楽」というと、「音」を「楽しむ」という字を書くものだから、ストレートにただ楽しめば良いと思われがちである。他方、クラシック音楽の演奏会などでは、音楽はしばしば、精神的な体験としてひたすら真面目に聴くべきものとされたりもする。しかもそういう状況を指して、日本人は音楽の本当の楽しみ方を知らないなどと言う人も現れたりする。だが、音楽が文化の一環をなすものである以上、問題はそんなに単純であるはずはない。西洋においても日本においても人々の音楽とのつきあい方は、長い歴史の中でさまざまに変化してきたし、明治以降、日本人が西洋音楽とはじめて接触する過程の中でさらに複雑な変化をみせた。この講義では音楽を「楽しむ」ということをめぐって、また音楽と趣味や娯楽といった概念との関わりをめぐって、西洋において、日本において、そして西洋文化と接触した明治以後の日本においてどのようなことが起こったのかについて、1. 高尚な音楽と低俗な音楽、2. 楽な娯楽としんどい娯楽、3. 「正しい」楽しみ方と「間違った」楽しみ方、という３つのテーマにそって考えてゆく。
(なお、この回の講義は、二人の講師がこれらのテーマに沿って交互に話を進めてゆく形式で進めるので注意されたい。また講師によるピアノの実演もある。)

4月9日(土)

講義題目

日本型年功制は楽だったのか

経済学研究科教授 高橋伸夫

日本企業で、1990年代半ばから盛んになった成果主義の導入とその失敗で、人事制度や日本企業の経営スタイルについて、見直す機運が生まれてきた。成果主義導入の推進者たちから、年功序列で生ぬるいと矢面に立たされてきた日本型年功制だが、はたしてそんなに楽なシステムだったのだろうか。企業で働く人間にとって、本当の意味での「楽」とはどういうことなのだろうか。経営学の立場から、あらためて問い直してみたい。

講義題目

サルの社会、ヒトの組織 ―人間やっぱりサルだった―

情報学環助教授 佐倉　統

人間は、サルの一種である。だから、その行動や社会も、サルとしての特徴をたくさんもっている。権力志向、仲間はずれ、よその群れとのケンカ……。逆に、サルと比較することで、ほかの動物にはない「人間らしさ」も浮かび上がってくる。人間にとって、社会や組織の中で暮らすことは、楽なのか？　そもそも何が「楽」で、何が苦痛なのか？　はたまた、「楽」なことは「良い」ことなのか？――そのあたりを、じっくり考えてみたい。

4月16日(土)

講義題目

がんと「楽」

医学

が
で
や
一
体
治的がん治療（緩和ケ
味な抗がん治療と、激
には、「死を前提としな
「楽しみ」、苦痛なく、「

4月23日(土)

講義題目

それでもテレ

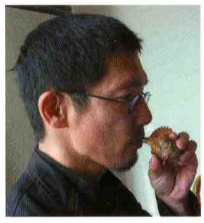
情報

あ
は
統
3,4
タ
にわたって貿易黒字を
遊ぶのでしょうか？そ
的複合体」とも呼ぶべ
てさまざまな角度から

5月14日(土)

講義題目

そこそこ都市



生産

事
た
び
誰
にいいことだろうか。
の理想の都市像があっ
西の理想都市をふりか
像をそこそこに模索し

学系研究科助教授　中川恵一

しが増えている。10年後には、2人に1人ががん死亡すると予想される。がんは高齢者ほど発生しやすいため、高齢化が進むほど多くなるからである。方、高齢化社会では、手術か抗がん剤などの、身的負担の大きな治療は難しくなる。従って、非根ア）のウェートが大きくなるが、まだまだ、無意しい痛みを伴う無惨な死が少なくない。この背景い」人生観があるのではないか。有限の時間を楽」に死を迎える準備について考えたい。

講義題目

リラックスと自然体 —その矛盾と逆説—

教育学研究科助教授　西平　直

リラックス。簡単なことだ。力を抜くだけ。ところがいざ意識的に力を抜こうとすると、これは難しい。たとえば一発勝負の入学試験。ここ一番の大舞台。緊張せずに力を抜こうと思えば思うほど、よけい焦る。意識するなと思えば思うほど、よけい意識してしまう。寝ようとする努力と同様、この場合、努力は逆効果なのである。ではどうしたらリラックスできるのか。力みの取れた自然体とはどういうことなのか。その矛盾や逆説を解きほぐしたい。

ンビゲームはオモシロい

科学環助教授　馬場　章

なたはテレビゲームをプレイしますか？世間でなにかと評判のよくないテレビゲームですが、計によれば、国内のゲームへの参加人口は44万人に達しています。また、いわゆるデジルコンテンツ産業の中でゲーム産業だけが長年確保しています。どうして人はテレビゲームでれは面白いからにほかなりません。「現代の知きテレビゲームの面白さの秘密を、実例を通し解き明かしていきます。

講義題目

楽々3次元コンピュータグラフィクス

情報理工学系研究科講師　五十嵐健夫

3次元コンピュータグラフィクスは、映画やテレビなどで日常的に目にするようになってきている。しかし、一般の人はそれらを「鑑賞」するだけで、3次元的な表現を自ら「作成」することは依然として困難である。我々は、一般の人でも手軽に3次元的な表現を利用できるようにすることを目的として各種の技術開発をおこなっており、本講義ではそれらについて簡単に紹介する。具体的には、手書きスケッチから3次元形状を作成する技術などについて紹介する。

市のすこゆる生活

産技術研究所助教授　村松　伸

都市は古くから理想の姿が追求されてきた。軍的には堅牢さが求められ、王は豪奢さを要求し1920年代から始まる近代主義は、高効率で、かぴかの都市を造りだそうとしてきた。でも、こりも速く、強く、多くをめざすことがそんなすこやかに、ゆるやかに生活するためには、別てもいいのではないのか？本講義では、古今東えり、「そこそこ都市」という新たな理想都市てみたい。

講義題目

都市の眼の楽しみ —ミステリー・考現学・タウン誌—

人文社会系研究科助教授　佐藤健二

都市をただ人口が集中した地域と規定するのは不十分である。社会学はそこに新しい生活様式の誕生を論じ、人間の思考や感性にまでわたる変容を感じて、分析していった。都市という環境の特質を、「楽」という観点から見直す。19世紀都市の群衆文学としての推理小説・ミステリーの誕生と、震災後の大都市盛り場での考現学的採集の試みと、都市東京の忘れられた歴史発見につながっていった現代のタウン誌の軌跡をとりあげる予定である。

東京大学公開講座聴講申込のご案内

聴講資格　成人一般・大学生・高校生

定　　員　800名

会　　場　**東京大学大講堂（安田講堂）**

聴 講 料　全講義（5日間）4,000円　　選択（1日）1,000円

※高校生は半額とします。

申込受付　**平成17年3月10日(木)から**

申込方法　「聴講申込書」に必要事項をご記入の上、申込書記載の手順に従ってお申し込みください。

申込書はHPからもダウンロード可能です。

※当日会場での申込は、定員に余裕がある場合のみ受け付けます。

修了証書　全講義の聴講を申し込まれた方が3日以上出席された場合には、ご希望により修了証書を差し上げます（選択申し込みで3日以上出席されても交付できません）。

東京大学への経路

●鉄道利用

［本郷三丁目］地下鉄丸の内線・大江戸線

［湯島・根津］地下鉄千代田線

［東　大　前］地下鉄南北線

●バス利用

【お茶の水駅】

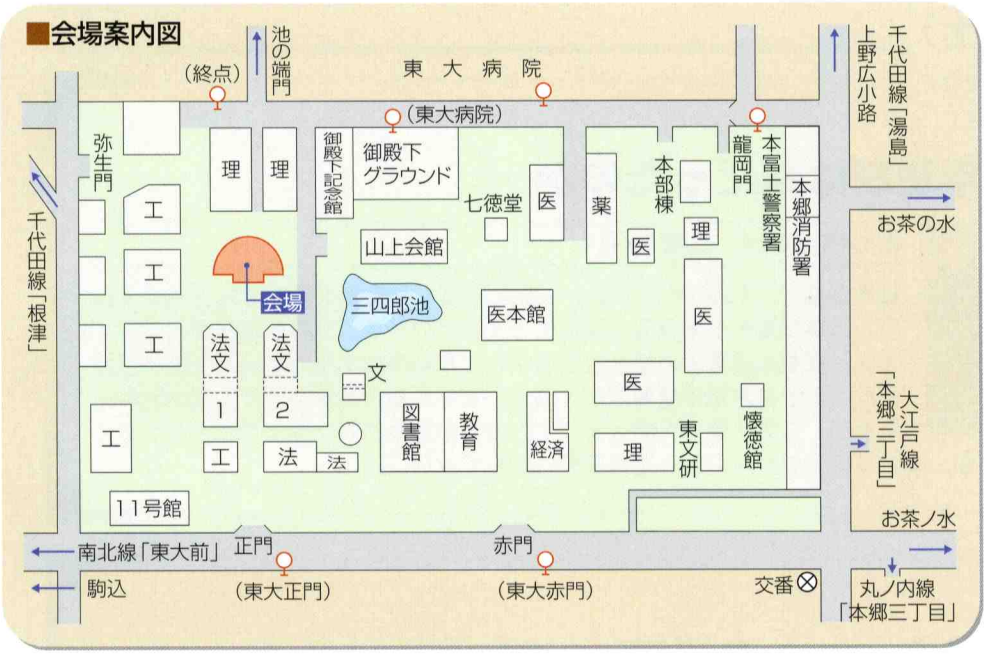
茶51駒込駅、王子駅又は東43荒川土手行 → 東大（赤門前、正門前、農学部前バス停）下車

学07東大構内行 → 東大(龍岡門、病院前、構内バス停)下車

【上野駅及び御徒町駅】

都02大塚駅行 → 湯島四丁目下車(御徒町駅のみ)

学07東大構内行 → 東大(龍岡門、病院前、構内バス停)下車



お申し込み先　〒113-8654　東京都文京区本郷7-3-1　東京大学総務部内

財団法人 東京大学綜合研究会

お問い合わせ　電話　03-3815-8345（直通）

ホームページ　http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_j.html

―多数の方の聴講を心から歓迎いたします―

聴　講　申　込　書

一般	ふりがな 氏　名	年齢　　才 性別　男　女
高校生	高校名 ふりがな 氏　名	高校　　年　　年齢　　才 性別　男　女
現住所 連絡先	〒　　－ 電話　　－　　－	
職業	公務員・会社員・教員・自由業・自営業・学生・高校生・主婦・無職・その他	

希望受講日に○を記入		申込締切日（必着）	聴講料（高校生は半額）	
4月　2日（土）		3月29日（火）	¥1,000	合計聴講料
4月　9日（土）		4月　5日（火）	¥1,000	
4月16日（土）		4月12日（火）	¥1,000	¥
4月23日（土）		4月19日（火）	¥1,000	
5月14日（土）		5月10日（火）	¥1,000	
全講義（5日間）		―	¥4,000	

【申し込み方法及び受講料のお支払いについて】

1．「聴講申込書」（この用紙）に必要事項をご記入ください。

↓

2．聴講料を、最寄りの郵便局から下記口座へお振込みください。

口座番号：00100－6－110037　　加入者名：東京大学綜合研究会

↓

3．振込後、**「郵便振替払込金受領証」のコピー**をこの用紙下記に貼付し、**官製はがき**を同封の上（宛先に申込者の住所・氏名を記入）、下記へ封書でお申し込みください（各講義締切日必着）。折り返し、聴講券をお送りします。

☆申し込み先

〒113-8654　東京都文京区本郷7－3－1　東京大学総務部内

（財）東京大学綜合研究会　公開講座係

☆お問い合わせ　03-3815-8345（直通）

郵便振替払込金受領証コピー貼付欄

（受領証そのものでも構いませんが返却はできませんのでご注意下さい）